



昭和43年(1968年)

3月号(No.273)

 社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

常さん小伝・Ⅲ	初見一雄… 1
故中村清太郎氏略年譜(Ⅰ)	安川茂雄… 2
海外登山	
東京農大H.K.隊(1967)	宮森常雄… 4
日印合同婦人ヒマラヤ登山隊(1968)	
経過報告(Ⅰ)	同事務局… 5
会員通信	
加納一郎氏北極圏へ	同後援会… 6
「山」編集委員殿	酒井俊雄… 6
図書紹介	
登山百年史(成瀬岩雄)	… 10
越後駒ヶ岳の気象(松田雄一)	… 10
山溪記(岩永信雄)	… 10
登山ゴジューン・バカン(吉沢一郎)	… 12
図書委員会報告	… 12
この一本展(Ⅱ) 明治百年山岳図書	… 3
寄贈図書受入報告	… 11
英文日本紹介図書受入れ	… 12
山岳図書交換・販売の集り	… 15
会員近況	… 15
『早春の多摩・秩父』 水田健之輔	… 5
山形支部長藍綬褒賞	… 5
会務報告	… 12
役員会・会員異動・新入会員(15)	
ルーム基金入金報告	… 14
山小屋繁昌記	… 事務局… 6
【資料】	
Hindu Raj 概念図	(ⅠY)… 7
Hindukush 高峰初登頂表	(Ⅱ)… 8

お知らせ

第二四二回小集会

 △とき 三月二十七日(水)
18時30分
▽ところ 本会集會室
「私の登山」

 名譽会員 松本善二氏
今月の定例小集會は、今年度名譽会員に推挙されました松本善二氏にお話をお願いすることになりました。

同氏は一九一六年本会に入会。丹沢山塊初縦走、谷川連峰初縦走などを含めて、数十年に亘る登山を経験、現在もお八、八十歳を越える高齡にも拘わらず山歩きを続けておられます。

山村文化等の研究と多くの登山を通じての興味あるお話しを伺えるものと期待しております。お誘い合せの上多数ご来会下さい。

日印婦人合同ヒマラヤ登山隊歡送会

 △とき 四月十二日(金)
18時30分
▽ところ 本会集會室
△会費 五〇〇円

インド、ヒマラヤ・チャンパへ遠征する日印婦人合同ヒマラヤ登山隊へ本会から参加する隊員は、いよいよ四月月中旬に出発する運びとなりました。

同隊の成功を祈って、右により、歓送会を開催いたしますので、多数ご参加下さい。

準備の都合がありますので、参會ご希望者は、四月九日(火)までに事務局までお申出下さい。

常さん小伝・Ⅲ

初見一雄

明治三十四年から昭和二十四年までだから、正確にいえば四十九年間、常さんは上高地で暮したことになる。その間一カ年は兵隊にいらしたから、正味は四十八年だ。それに、昭和六年だか七年かに一年近く留守をしたから、又一カ年減って四十七年間である。

兵營生活は金沢市である。兵種は輜重兵の短期現役で、正式には輜重兵持務兵という、兵隊というより人足に近い種類であった。短現だから一カ年の奉公のち放免になる。

常さんが軍隊に興味があったかどうかは知らない。問えば、ただ一カ年とられたことがあるというだけであつた。金沢とはっきりいうこともなかったから、金沢だと断定するわけにはいかない。ただ輜重兵大隊は第九師団では金沢にしか存在しなかったから金沢だと決めたわけである。輜重輦卒といえ重服を着けた人夫で、外でも内でも兵隊あつかいはされなかったものである。

しかも一ツ星さえないとすれば、その生活に楽しさなどありえよう筈はない。

律儀な面もちで、直立してお辞儀をする、そういう姿勢をときたま見せることがある。この態度が唯一の軍隊生活のなごりだったか。

喜びを身体全体に満ちて、ひとを迎える、こういうときには、つくづく善人だなあと思う。

そして天真爛漫なひとみを人にむける。

あるものを全部さらけだして、ありったけのものを出し尽して人をもてなそうという、底抜けの善意がみられる。それは英国人の尊重するホスピタリティどころではない。

極端にいえば――表現がすぎるかも知れないが――前後の見境いがなくなるといふ。他人様から預かったものさへ出しかねないのである。しかしこのようなことは無かったにちがいないが、そういった勢いが感じられるのである。

お茶がその一つ。

常さんの小屋を訪れる人はだれしもこのお茶で悩まされる。このお茶が勢

を無事切りぬけられれば、まず一人前といつてよい。

大して旨くない日本茶であるが、その都度必ず入れ替えてすすめる。

一杯で咽喉に湿りをくれて、「三杯でかわきが止まればあとは用はない。」「いいからおきまっしょ」と手をふつてくる。

岩魚が獲れても、これと同じである。そんなに焼いてしまつてよいのかよと、ハラハラしながらみているわけだが、表へ出ていって全収獲のワタを出してくる。塩をふつて串にさす。篝火の廻りに突き立てるとやがて香ばしい煙りがある。

米・味噌と交換する分だけは、つまり生活の資だけは、除けておかなければ困るではないかというのだが、みえか、気負いが、さらに動する気しきはない。

魚をみて、なかみを大さっぱに計算して金を渡してやる、というふうな才覚をもち合せなかったわれわれは、御馳走になるのは有難いが、遠慮勝ちになるのは当り前だし、その上何かしら心の底に、にがっぱいうづきが残る。

梓川にいくらでも湧いてくる魚だから

らと本人は考えているのであろうが、契約している宿屋の方では困ることになる。夕飯に出す塩焼きを名物の一つとも考えているから、数がそろわなければなるまい。一軒だけでも百人に近いお客の泊る日が続く有様では、予定の狂いは番頭なかせであらう。自然が相手だから不漁の時だってある。しかし日常の暮らしは欠かせないから、どうしても前借りということになる。次の漁で返すからと、米を借りる、ついでに酒もかせろとなる。月給があるが、梓川は賞与を流してこない。常さんの天衣無縫さをもつてしても決済はつけねばなるまい。
 相手が営業の基盤にたつた計算づくの考えで対処してくる。これは至極當然なはずだ。それに常さんに比べれば、海にも山にも千年以上、甲羅も生えようとお人柄の仁もあろうから、明日だ、あさってにも、では済まされまい。気まずいことが起りはないかと心配をしたが、このことは時にはあったのである。
 いけないことがもう一つある。それはお酒である。
 かといって癖が悪いとか、酒乱であ

るとかいうのではない。その点からい
えば静かに飲むたちで、味わいつい
くといった仲々風格あるものである。
痛飲、乱に陥るなどの部類ではない。
しかし好きだからあるだけを飲む、飲
みつくしてしまふ方の口である。

すこせば宿酔もする。墨汁を五合も飲んだ様な顔付を見せる朝もある。酒呆けというか、飲みほうけというか、相当以上をすごす人物のうちには物を忘れてしまうのがある。

履物を間違えたり、帽子を忘れてくる。煙草入れをおいてくるなどは、自分の財産を減らすだけだから他人に迷惑はかからない。しかし借りを忘れるとなると一寸ばかり違ってくる。大變調法で有益な忘れ方であるに相違ないが、困る人が出てくる。

飲み初めのうちは憶えている筈であるが、飲むほどに酔うほどに、金になる物にしる、借りたことがおぼろしくなってくる。その上気字は決して少さくならない。無理して忘れるわけではない。天然自然に忘れていくのである。借りたことを忘れるだけではなくて、借りた覚えがてんからなくなってくるのである。やがて借りていく心底から思いこんでしまう。

すべての酒飲みが、か様な次第であるというのではなく、又常さんがいつもそうであるというのではない。時々起きる宿屋の番頭との小さなトラブルをいっていると、常さんの方が早に悪い。いや分が無いといった方が早いくらいだ。理屈にも何にもならない、明らかに忘れてしまっているのだ。

しかし自らは正しきを踏んでいるとの信念があるから、ちつとやそつとでは引きさがれない。とほけているのではなく、まして悪意などあろう筈もない。忘却の彼方へ完全に消えてしまっているのだ。

いになる。

他人を押しのけないまでもなく、筋を組立てて話のできる人柄ではない。少々のは忽ち譲ってしまう性なのだ。譲って、譲ったあげく、その又片隅で、息をついているのだ。

気持の上に引っかかっているのか、腑におちないものがあるのか、次の酩酊のときそれを思いだすらしい。

口のなかでブツブツいつている、口を曲げて天の一角をにらむ、りきんでいるのである。

その少し脆さのある気質は、しんは弱気なのである。それにお酒がからまって内攻してくるのであろうか。その気持ちはよくわかるのである。そしてこれは少しばかり悲しい酒だ。

「間違っていないネ!!」
突如として喚くのである。この時は
相当以上にまわっているのである。

遺作

(未完)

ての管理世話人会有志によって催したが、その第二回として一月二十七日午後より阿佐ヶ谷の中村邸において故人の遺作を内覧する会がおこなわれた。出席者は山岳画家として石井鶴三、足立源一郎、上田哲農の三氏に友人として田部重治、神谷恭の両氏が顔をみせられて長男の浩太郎氏夫妻ともども故人の画業をしるべき、想い出話に刻をすごした。(安川茂雄記)

(安川茂雄記)



故中村清太郎氏
略年譜
(I)

安川茂雄
(二四一八)

明治二十一年（一八八八年）四月三十日、父中村清吉、母すみの長男（一人息子）として東京浅草区戸戸に生れた。今戸には母すみの父、戸沢栄司（工芸家）の家があり、父の家は日本橋通り油町（現在の堀留一丁目付近）で、ゆかた間屋「中清」であった。幼少年時代は日本橋で育ったが、その付近に於いて「草屋の芽」中で「育った日本橋区の間屋町」通油町界隈などは下町の中の下町で、しかも都市らしい施設は殆ど無く、もとより分厘の利を争うから、人氣と云っては劇しくかつ陰しいもので、何とも息苦しい、味気ない、また昔ら昔らしい限りの土地柄であった」と述べている。

小学校も水天宮の裏手にある有馬小学校で、卒業後、のち府立三中（現在の両国高校）へすんだ。この折に三枝威之介、加賀正太郎などのクラスメイトと府立一中の「博物学同志会」に匹敵する「原人講」なる山旅グループをつくり、箱根、日光、御岳、北岳、乗鞍、槍白馬、穂高、八ヶ岳など信飛の高峯に登山を試みた。すでに三中に上る前、高等小学校時分、講中の一員として富士山に登ったのが山の洗礼とみてもとく、それ以前は江ノ島などへ遠足や関西、北陸などの旅行を試みている程度だった。もともと自然が好きであり探検が旺盛であったが、外では家業の關係から父の指図で、方神田にいた画家川端玉章のもとに通っていた。

山旅グループ「原人講」は、仲間

うちで『寛政雑誌』などもつくり登山紀行や水彩画を掲載し、中村清太郎も中心メンバーの一人だった。この頃（明治三十年代後半）にいたると、小島鳥水の山岳著書や『博物の友』、高野式『日本山嶽志』なども刊行さ

されていて大いに刺激をうけた。やがて田岳会も設立されて、「山岳」が明治三十九年に創刊された。

明治四十年（一九〇七年）府立三中より東京高商（後の一橋）に入学し、同年五月日本山岳会にも加賀正太郎と共に入会した。この手続きは「山岳第三年第三号」の「会報」中に記載されており、同期の「入会者」としては田中善左衛門、石崎光瑠などの名前がみえて、会員番号一五三番であった。「原人講」の僚友三枝威之介（会員番号三十五番）は、すでに入会しており高野鷹蔵などとの交友もあった、この夏には中村清太郎などのメンバーと共に白馬、五竜などの縦走、上高地滞在、槍登山などをおこなっている。

この頃の一時期、中村清太郎は外交官を志願したい旨の気持があったらしく、東京高商へ入学したのも彼の希望ではなかったといふ。もとものと彼の志望は美術学校への進学であつた。そこで本郷絵画研究所にも学び、同所に油絵の先輩ともいえる多田良吉がいた。

明治四十一年（一九〇八年）一月十六日山岳会における第一回有志晩餐会が麹町の富士見軒で催された。参加者十六名で發起人は辻本満丸で、この会に中村清太郎は出席している。この会と前後して事務所が牛込の城数馬方から横浜本町の高野鷹藏方へ移されており、彼はこの事務所に屢々訪れては、小島島水、辻村伊助、梅沢親光、三枝威之介などの人びとと山の話をしたり酒をのんだりし

た。この頃、彼は山と絵画に的をしほり研鑽にはげんでおり、後年の自己来歴中に、

「性癖に従て山に入り又自ら画道に志す。」と記している。

明治四十二年（一九〇九年）七月、彼
にとつて画期的ともいえる赤石山脈
の初縦走が小島鳥水ら日本山岳幹
事らと行を共にした。

「本会幹事高頭仁兵衛、高野鷹藏、小島久太、会員三枝威之介、中村清太郎五氏は、画家秋木鐵之吉氏を加えて、七月二十日甲州猪沢に到り、二十一日湯島温泉に一泊し、翌二十二日登山準備を整え、二十三日人夫十一人を引率し、赤石山脈縦断の行程に上りて新沢嶺腹に野宿二十四日大井川西俣の真砂沢に野宿、二十五日愚沢川俣に登つて野臥、二十六日千枚沢岳、愚沢岳、西河内岳、魚無河内岳の四大岳を縦走して尾根の凹窪地点に野臥、二十七日赤石岳の前山及び本岳を縦断して南方尾根の中腹に野臥、二十八日大森林をおりて小渡川を二十七日徒渉し、小渡温泉に一泊、二十九日大河原を経て飯島に一泊、三十日一行を解散して行を終れ、其後三枝威之介氏は八月初旬北アルプスに向つて、鹿島槍ヶ岳を登攀せらるゝに同じく小島久太氏は富士山の御中道を一周せられ、中村清太郎氏は八月下旬美濃恵那山に登り、転じて信州穂高山を究められたり。」（『山岳第四年第三号』、会員登山報より）この山行は同年夏の石崎光瑠パーティによる剣登、鶴殿正雄の穂高山縦走などと共に白眉の山行とされている。

(未完)

(補筆) 故人について明治二十年三十年が曖昧であり「草の芽」なども年代が不明な点が多いこと、調査不
充分の点お詫びします。

☆ この一本展 ☆ (Ⅱ) 明治百年山岳図書目録

著者	書名	発行年 (明治)	発行者
池田天游	アラスカ氷山旅行	6	雲梯舎
梅雪居士	富士廻土産	36	内田書肆
高島北海一	写山要訣	36	東陽堂
田中貴雅	信濃の花	36	荻原朝陽館
井上二	中央亜細亞旅行記	36	民友社
河口慧海	西藏旅行記 二卷	37	博文館
大竹庄次郎	銀山平探検記	37	
小島鳥水	不二山	38	如山堂
	日本山水論	38	隆文館
	山水無尽蔵	39	
	高原生活	39	日高有倫堂
	日本山嶽志	39	博文館
伊藤銀月式	槍が嶺の美観	39	高美書店
丸山文彦	{日本高山植物図譜 二巻}	39~41	成美堂
三野好太郎	高山植物叢書 二巻	40~41	橋南堂
前田曙山	地理研究 阿蘇登山	39	九州之少年社
矢野国太郎	鳥水文集	39	本郷書院
小島鳥水	富士史 上巻	39	金港堂
三輪義熙和	日本の高山植物	39	二松堂
小西随	山水写生	39	日高有倫堂
久保天随	山水百種	39	画報社
高島北海外	日本名勝写生紀行 第一巻	39	中西屋書店
岡野栄初男	西藏通覧	40	丸善
志村鳥嶺	やま	40	橋南堂
前小島鳥水	雲表	40	佐久良書房
小山浦瑞洲	浅間登山の友	40	東亜堂書房
国府犀穂	富士一周	40	隆文館
小平福百穂	富士山大観	40	如山堂
小島鳥水	木曾路 付・御嶽登山案内	40	岩屋商店
征矢野七郎	奇巖怪嶽	40	本郷書院
江見水蔭	金剛杖	40	春陽堂
遅塚麗水外	蝶類名称類纂	40	警醒社
高野鷹蔵	露分衣	41	文禄堂書店
遅塚麗水	大月蓮華	41	佐久良書房
山崎紫紅	高野聖	41	"
泉鏡花	富士山スケッチ	41	金尾文淵堂
杉浦非水	富岳志	41	東京堂
静観道人	如山水画論	41	如山堂
小島鳥水	高山植物採集及培養法	42	成美堂
志村鳥嶺	科野名所集	42	城南書屋
色部祐二郎	富嶽案内	42	富山房
二木運一	木曾御嶽火山地質調査報告文	41	
	富士登山案内	41	高嶺社
勝又将之助	神鑿	42	前川文楽閣
泉鏡花	ヘチン博士 神秘国探検	42	小川尚栄堂
高野弦月(訳)	高原	42	如山堂書店
吉江孤雁	行雲流水	42	博文館
大町桂月	霊山富士	42	三友堂書店
中谷竹蔵	木曾案内	43	藤森書店
津島壱岐	山水往來	43	長明堂書店
遅塚麗水	奥羽の北海道草鞋日記	43	梁江堂
逕伊賀	深山帯大探検	43	公立社
高橋舟齊	浅間山	43	田中書籍出版部
小諸小学校		43	

著者	書名	発行年 (明治)	発行者
小島鳥水	日本アルプス 第一巻	43	前川文楽閣
"	" 第二巻	44	"
"	" 第三巻	45	"
"	" 第四巻	45	"
日本山岳会	高山深谷 第一輯	大正43	日本山岳会
"	" 第二輯	44	"
"	" 第三輯	45	"
毛呂権蔵	上野国志	43	環水堂
岡村利平	飛驒山川	44	住伊書店
水谷弓夫	飛驒遊記	44	奥嶺書院
伊藤銀月	日本風景新論	43	前川文楽閣
村岡良弼	甲信紀程 二巻	43	正文堂
志賀重昂	世界山水図説	44	富山房
大下藤次郎	水彩写生旅行	44	嵩山房
吉江孤雁	旅より旅へ	44	光風館書店
幸田露伴	掌中山水	44	聚精堂
	海道記, 廻国雑記	44	富山房
早田文蔵	富士植物帶論(英文)	44	丸善
小熊和助	スキー写真帖	44	
歩兵第七連隊	立山強行軍スケッチ	44	
	スキー創刊号	45	
	富士百景	45	実業之日本社
	山岳第一巻第一号より	39~	日本山岳会
	博物の友自第二巻至	35~	日本博物学会
	第六巻		志会
	信濃博物学雑誌 20冊	35~	信濃博物学会
Rein, J. J.	Japan : Travels and Researches, undertaken at the cost of the Orussian Government	1884	London
Chamberlain, B. H. and Mason, W. B.	Hand Book for Travellers in Japan, 3rd ed.	1891	London
Weston, W.,	Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps.	1896	London
Bird, J.	Unbeaten Tracks in Japan	1885	London
Tristram, H.B.	Rambles in Japan	1895	London
Parsons, A.	Notes in Japan	1896	London
Hearn, L.	Exotics and Retrospectives.	1910	Boston
Ponting, H.G.	In Lotus Land Japan	1910	London
地 図			
宮脇通赫	大日本分国興地全図	10	山中市兵衛
	東北の部	"	
	北海道の部	"	
森文助	甲斐国全図	12	内藤右衛門
平林武	信濃地図 26万分の1	39	金華堂書店
	富士火山近傍地質図	30	
神津俣祐	木曾御嶽火山地質図	40	
絵 図			
	相模国大山絵図	11	吉川帆澄
	相陽勝地大山全景の図	27	松岡岩次郎
	武蔵一御嶽山全図	19	林大概
	觀富山竜華寺境内之内図	23	青山豊太郎
	富士山北口全図	34	中村月嶺



東京農業大学 HINDUKUSH 学術調査隊

——Buni Zom南部——

隊長 宮森常雄

編者注・

隊員名

は「山」

二六五号

四頁にあ

るが少し

変更があ

るので再

掲する。又、シユベ

ゾム登頂その他につ

ては宮森隊長から現

地報告

(二六八号九頁)があ

ったが、これも概略だ

ったので改めてここ

に御紹介

することにした。

隊員・宮森常雄(隊長・

36・農産加工、調査、

向後元彦(27・農業経済

調査)、根本徳彦(23・農

業作物調査、門田昭(23・

ファイリスタンにて一カ

月半調査)、向後紀代美

(23・東大大学院、地理調

査)、石井一郎(20・移牧、

農産加工調査)、大阪府

大現地参加二名 田中

稔(22)、由利

秀夫(21)。

上掲写真の遠
山が Ghokan
Sar (6200m)と
すれば、昨年イ
タリーのピネリ
隊が登ったも
の。

登頂峰

一九六七・八・三

シユベ・ゾム西峰 (c. 6000 m)

田中、由利、石井

一九六七・八・一二

マコー・ゾム四峰 (c. 5000 m)

宮森隊長

(偵察及び概念図作成のために登った小ピーク)

一九六七・八・一四

チャクリ・ゾム (c. 6000 m)

向後夫妻、根本、石井、田

中。

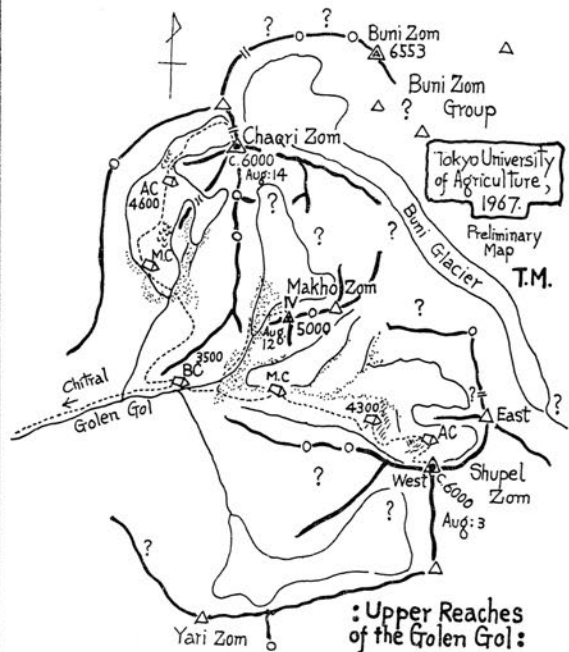
(肉眼では明らかにシユベ、ゾムより高い)

行動日誌抄

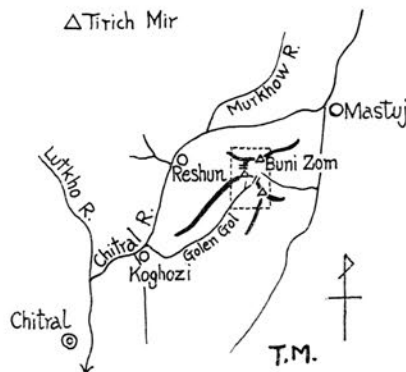
6・3 ボンベイ向け横浜発。

7・14 チトラル入り、大阪府大隊と会う。

7・21 この日まで農業調査。



△Tirich Mir



Sorry no scales.
Recopied by Iohno Yoshizawa



チャクリ・ゾム

8・29 まで農業調査。
8・30 全員ファイリスタンへ。9
月中旬まで。その後分散調査。
宮森ネパールへ、向後フンザへ、
門田アフガニスタンへ、石井、根
本はチトラル。
10月中旬、宮森帰国。
12・17 門田帰国、向後英国へ。
1・29 石井、根本帰国。

8・6 チャク
リ・ゾム攻撃。
8・7 再度の
攻撃。
8・8 10 B
Cにて休養。
8・13 三度目
の攻撃。
8・14 チャク
リ・ゾム初登
頂。
8・18 チトラ
ル着。
8・20 田中、
由利、ベシヤ
ワールへ。

☆日印合同婦人ヒマラヤ登山隊☆

経過報告 (I)

— 同事務局 —

日付	事項	内容	日付	事項	内容	日付	事項	内容
昭和42年7月	インドより来信 (第一信)	三田副会長にインド登山財団Kohli氏より婦人登山会による合同登山を提案してくる。	10:21	インドへ発信 (第三便)	隊員5名の氏名および日本側連絡係を通知。インドよりの医師派遣、シェルバ・ポーター事情の連絡依頼	2:1	隊員変更	崎英子に決定。武田満子隊員の健康上の理由による辞退を承認。会員に対して1口500円の基金依頼を決定。報道関係の援助を受けるべく交渉を始めることを決める。
7:21	委員会・事務局設置	理事会においてKohli氏の提案を受け入れることを決定。委員会メンバー：三田幸夫 (委員長)、日高信六郎、深田久弥、村井米子、加藤泰宏、折井健一、辰沼広吉、事務局メンバー：広谷光一郎、村木潤次郎、丹部節雄、小方全弘、関口周也、川森左智子、婦人懇談会	11:23	インドへ発信 (第四便)	(1)インド側隊員の氏名 (2)入山可能地域の詳細について (3)シェルバ・ポーター事情 (4)食糧・装備・薬品等についての方針。上記を問ひ合わせる。	2:5	インドへ発信 (第六便)	(1)メンバー及人数の変更 (2)日本側特参の装備・食糧・薬品等リスト (3)出発日時 上記3点を連絡登山予定につき詳細の連絡依頼する。
9	会報にて隊員公募	会報267号に下記要領にて隊員公募を発表。 入山地域：インド北西チャソンス地域 時期：1968年アレモンスン費用：約60万 (個人負担)	12:15	竹田吉文氏に現地交渉を依頼	12月15日前用のため渡印の会員竹田氏にインド宛第3・4便に關しての接衝を依頼。	2:10	インドより来信 (第三便)	Miss Nandini M. Patel 高、隊員の氏名は、Miss Kokila B. Mehra, Miss Dolly B. Shaher, Dr. Meena Agrawal, Miss D. Z. Khiantle, Mrs. Praveen Gurta
10:12	隊員決定	委員会において下記5名の隊員を決定。 須田紀子 (会員番号5390) 5480 折井正子 (" 6043) 武田満子 (" 6123) 宮崎英子 (" 6384 三島馨子 (" 関西支部)	1:11	スケデール最終決定	委員会においてインドよりの第2便を検討、インド側の提案を受け入れ、準備の大幅な変更を決める。	2:13	朝日新聞社後援決定	
1:15	インド宛発信 (第五便)	インド側提案を全面的に承諾した旨伝える。日本側メンバーの出席を3月29日 (空路 New Delhi) とする。	1:22	隊長決定	委員会において隊長を宮崎英子に決定。			



(註) この計画の接衝については、在日インド大使館ナシダ氏および在京のアノンシャー氏 (1961年インド・エベレスト登山隊副隊長) に連絡をとり、情報を交換している。

◇山形支部長藍綾愛章◇
この度山形支部より、昭和四十二年十月に、本会山形支部部長後藤幹次氏が、旅館組合関係での功績により、藍綾愛章を授けられた旨、連絡がありましたので、お知らせ致します。

◇外国山岳会バッジ寄贈あり◇
会報二七一号に標記に関するお願いを致しましたところ、この度、昨年の兵庫県岳連のアラスカ登山隊に参加された、関西支部の大野光彦氏 (五八二三歳) から、合同登山の相手先のシヤタルの山岳会「The Mountaineers」のバッチを寄贈いただきました。早速バッチの額におおめしましたので御報告させていただきます。今後ともよく御協力下さるようお願い致します。(松田)

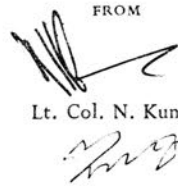
☆早春の多摩・秩父☆
(三三〇三) 水田健之輔
冬山行のつらさに小屋頂や春の空雲の雲いりけるきやんきの晴れの厳しき山重畳飯釜の湯気に向うは春の暖小室出づる老婦人に朝は冷や眼の山四恩の雲を遠かにも回恩天地・國王・父母・衆生の恩枯野木火焼やち天幕にボンチ・効く

○
足の力なれずとほしき岩登り地温箇所無口で登る単独行落日に塵をいならす二月空の露散り来し春の晴日やし晴雲霞宮の巨岩かなあやむかに登頂すまじしほえぬり

○
梅咲きし寒山寺に待つ旅装れ梅林や草家の碑前で梅茶喫し寄棟造この庭はいま梅日和

Season's Greetings

FROM



Lt. Col. N. Kumar

Tenzing Norgay

Nawang Gombu

AND

THE STAFF

 THE HIMALAYAN
MOUNTAINEERING
INSTITUTE
JAWAHAR PARBAT
DARJEELING
INDIA

会員通信

会員加納一郎氏極園へ

厳寒の候皆様には益々御清栄のことと存じます。

さて加納一郎さんの古稀祝賀記念事業は、皆様の御協力を得ましてその準備も順調に進んでおります。資金面でもまだ多少の問題が残ってはいませんが、いよいよ下記の日程に従って旅行していただくことになりました。

昭和43年2月19日 東京発

2月21日 パロウ着。北極水圏学術調査隊と共に一週間滞在。この間、機会を狙って氷島T3を訪問、見学。

3月1日 ジェノー、オスロー。アムゼン博物館、バイキング博物館、極地博物館など見学。

3月11日 ロンドン着。スコット極地研究所、王室地理学協会など訪問、見学。

3月17日 ニューデリー着。

3月19日 東京着。

この旅行見聞記は朝日新聞および東京放送テレビ(TBS)により報道されることになりました。

事業会は皆様の御厚志を深謝し、加納さんがお元気で北極圏散歩旅行をおたのしみ下さるよう祈っております。

事業総報告は、加納さんの御帰国後あらためて行ないます。
昭和43年2月4日

加納一郎氏古稀祝賀記念事業会
札幌市北11条西8丁目
北大 低温科学研究所
清水 弘気付

編集委員各位へ

一九六八年の新春を御慶賀いたし、お迎えになり益々御健勝のことと推察いたしております。

未だ拝顔の榮に浴さざる尊台に対し突然書翰を差し上げる失礼をお許し下さい。

昨日、日本山岳会々報「山」一月号を落手いたし、早速拝読いたしました。毎号そうでありますが、御多忙に拘わらず満三年近くも御編集のため並々ならぬ御努力をいただき、立派な会報を我々会員にお届け賜りますことは感謝のきわみでございます。

地方在住会員の一人として尊台をはじめ「山」編集委員各位の御精進御尽力に対し衷心より感謝いたしております。

地方に住む私にとっては、会報だけが唯一の会とのつながりであり、よりどころであります。今後共、会と会員のため何分共よろしくお願い申し上げます。いつもながら、尊台の登山に関する

御高説につきましては私も満腔の共感を抱くものであります。高山幽谷を極めることが岳人の総てではないかと思ひます。山を知ることにより精神的に一段とたかめられ、六時中の生活態度も岳人としてはずいぶん変わるのであると思います。今後とも時折折にさせて苦言を頂きたいものです。

1月号会短信欄に、はからずも年次晩餐会出欠返信中より小生のもの御掲載いただき恐縮至極に存じました。病床の身にて、ごちやうにも御無沙汰いたしてるところを、格別の御配慮を賜りまして、会員のうち知人だけにでも私の近況を知ってもらえたことは、望外の喜びであります。

それ以上に私を喜ばせ感激させたのは、数多き会員の中から、名もなきそれら一面識もない地方在住会員の一人からのものをとりあげ、御掲載いただいたこととあります。



『山小屋繁盛記』

本会のルームが、四二年の後半七月に、向井ビルに移ってからの来室者は、前半の神宮外苑コーポ時代と比べると、急激にふえ三倍以上になっている。これを表示すると左の通りである。

月別	場所	人数	摘要
1	神宮コーポ	一三	(この欄人数は月別人数に)
2	"	二	三(含まれる)
3	"	二	

虎ノ門時代には上京の都度、ルームを訪ねたものでしたが、現在では本部ルームはおろか支部のルームにさえすっかり御沙汰している次第です。関西支部委員の末席をけがしていたころの岳父とも疎遠没交渉の現状ですので、その感激と喜びは一入でした。

尊台を始め、編集委員各位の暖かい御配慮は老令会員の私にとって大きなはげましとなりました。会と会員の間の血の通った交流がここにあるのではないのでしょうか。しかも、JACではそれが如実に現れ行なわれています。本心に嬉しいことです。何でもないような、ちょっとしたお心づかいが会員を喜ばせ、はげまし、ささになるものであるかということをつくづく知らされました。

大切な紙面ではありますが今後ともこのようなものに、スペースをおさき下さいますようお願い申し上げます。勿々不備

2月11日

酒井 俊雄

合計	12	11	10	9	8	7	小計	6	5	4
小計	向井ビル									
		〃	〃	〃	〃	〃		〃	〃	〃
二、六三	三三	三三	三三	三三	三三	三三		二二	二二	二二
忘年会	八三	三三	三三	三三	三三	三三	六四	三三	三三	三三
ベルアン	三三	三三	三三	三三	三三	三三				
報告会	三三	三三	三三	三三	三三	三三				
忘年会	三三	三三	三三	三三	三三	三三				

この原因がどこにあるかを見ると、先づ交通の便と、ルームの施設といえよう。これまでの外苑コーポは、足場が不便で室も狭かつたが、新ルームは都心部にあり、国電神田駅から十二、

三分、地下鉄竹橋駅から五分、都電なら錦町河津電停のすぐ前の、八階ビルの五階という、交通至便な所にあり、環境もよく、眺望は素晴らしい。

約四十坪のスペースの中、集会兼会議に使用される室は、九月の移転披露パーティーには、来会者一二〇名の記録を作り、その他毎月の様に、三、四〇名の集いに使用されている。今後はこの会議室が、大いに役立つ事だろう。この他に談話室、図書室の利用者も、漸次増加しているから、今年は昨年以上の来室者が期待出来る。

会のルームは会員自身のものであるから、都内近郊の方は勿論、地方から上京された方も、気軽にルームを訪れ、利用される事を希望します。これには地の利、施設の優秀さに加えて、居心地のいい事が、ルームの繁栄につながる事を、小屋番一同銘記して、今後の改善、サービスに努め、一層の成果を挙げ、会員の御期待に添うつもりですから、各位の御協力をお願い致します次第であります。(事務局)

"Österreichische Alpenzeitung"

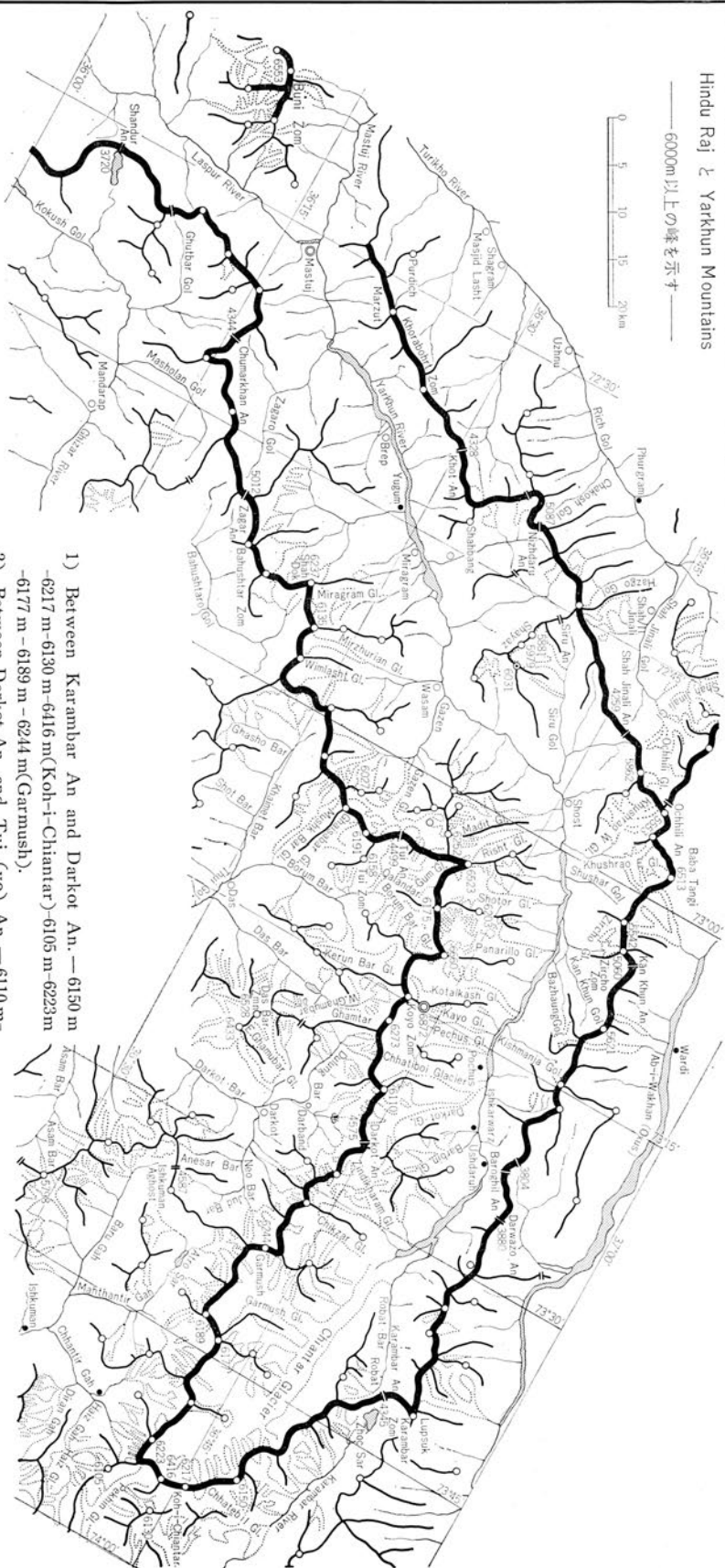
— Nov./Dec., 1967: Folge 1356 —

昨年オーストリア隊が、ソ連からバミール(トランス・アラビ)に招かれて、レーニン峰(七三三四m)に登ったことは、既に御報告済みであるが、今日届いた首記の雑誌を見ると、61頁の半分がこの記事で占められているのを発見した。

四枚の写真もいし、概念図も大変参考になるものである。彼らは六六七三mまでの山8峰と、レーニン峰で東壁、北壁、北東及び北西山稜の初登攀をやっている。「ベルグシュタイガー」にも出ていたの、これらを纏めて書いてみよう。(吉沢)

6000m以上の峰を示す

0 5 10 15 20 km



According to a re-arranged map of 1/250,000 based on the "Survey of India" map of 1933, we find some 25 peaks over 6000 m (19685 ft) on the Hindu Raj Range and its neighbour, Yarkhun Mountains.

I have had no idea of existing some peaks over 6000m on the latter, but by studying the above map, I found, to my surprise, a peak named **Shayaz** had a height of 6031 m (19788 ft) which is situated on a mountain group, north-west of the Wasam village on the left bank of the Yarkhun River.

Now I am going to follow them from the north-east corner(Karambar An) to the south-west.

- 1) Between Karambar An and Darkot An. — 6150 m - 6217 m - 6130 m - 6416 m (Koh-i-Chiantar) - 6105 m - 6223 m - 6177 m - 6189 m - 6244 m (Garmush).
- 2) Between Darkot An and Tui (yo) An. — 6110 m - 6528 m (Das Bar Zom) - 6433 m - 6273 m - 6872 m (Koyo Zom, the highest) - 6660 m (Kotalkash) - 6203 m (Ponarrillo Zom) - 6175 m - 6523 m (Risht Zom) - 6252 m.
- 3) Between Tui An and Zagar An (5012m or 5008 m). — 6158 m (Tui Zom) - 6191 m - 6027 m - 6135 m - 6237 m (Shakhandok or Shah Dok, 6237 m).
- 4) Between Zagar An and Shandur An (3720 m or 3658 m). — On the main ridge, 5410m peak seems to be the highest, but on a south branch we find a peak of 5551m high.
- 5) From Shandur An, the main watershed runs to the south as far as the famous Lowrai Pass (3700 m).

There are no conspicuous peaks on this part of the

main ridge but you will find two higher groups of mountains on the north and east sides of Shohi Pass (5715 m) which connects the Laspor and Panjkora valleys.

Some of the peaks of the Buni Zoms exceed by some hundreds metres over our present standard and Chokhan Sar is 6143 m (late informed height is 6200 m) as shown in my other maps but the eastern group (Swat Kohistan) of the pass has no peaks higher than 6000 m: Miangul Sar (5960 m or c. 5600m), Falak Sar (5918 m) and Mankial (5718 m) are the only 3 highest peaks among them. (I. Y.)

ヒンズー・クシュ 高峰初登頂表 (6000 m 以上)

HIGH MOUNTAINS OF HINDU KUSH

— February 18th, 1968 現在 —

吉 沢 一 郎

No.	Area	Mountain Name	Altitude		First Ascent	Nat.	Leader (s)
			New (新)	Old (古)			
順 位	地 域	山 名			初登頂年月日	国 別	隊 長
1	E	Tirich Mir	7708	7706	1950 7-22	Nor	Arne Naess
2	E	Tirich Mir E	7691	7692	1964 7-25	Nor	Arne Naess
3	E	Noshaq (Doshaq)		7492	1960 8-12	Jap	Y. Sakato (酒戸弥二郎)
4	E	Tirich Mir W-1	7487	7500	1967 7-20	Cze	Vladimir Sedivy
5	E	Noshaq E	7480		1963 8-21	Öst	Gerald Gruber, H. Pilz
6	E	Istor-o-Nal	7403	7389	1955 6-08	Pol	A. Wilczkowski
7	E	Noshaq W		7401	1963 8-21	USA	J.E. Murphy, Jr.
8	E	Saraghrar S	7350		1967 8-24	Öst	G. Gruber
9	E	Tirich Mir W-4	7338		1967 8-06	Jap	K. Yamamoto (山本健一郎)
10	E	Saraghrar Central	7338	7349	1959 8-24	Öst	Kurt Diemberger
11	E	Saraghrar S-E	7307			Ita	Fosco Maraini
12	E	Shingek	7291	7281	1966 7-13	Deu	Thomas Trübsewetter
13	E	Istor-o-Nal E	7276	7248			
14	E	Istor-o-Nal N-2	7232		1967 6-29	Öst	Kurt Lapuch
15	E	Darban Zom		7220	1965 9-02	Öst	Markus Schmuck
16	E	Saraghrar S-E 2	7184	7220		Ita	
17	E	Udren Zom	7108	7131	1964 8-19	Öst	G. Gruber
18	E	Shachaur	7084	7116	1964 8-17	Öst	G. Gruber
19	E	Nobaisum Zom	7070	6999	1967 7-10	Öst	K. Diemberger, K. Lapuch
20	E	Langar S-E		7061	1967 7-25	Jap	K. Umezu (梅津晃一郎)
21	E	Langar Main		7060	1964 7-08	Deu	Dietrich von Dobeneck
22	E	Udren Zom S	(7050)		1967 8-11	Jap	K. Yamamoto (山本健一郎)
23	E	Saraghrar N		7040	1959 8-24	Ita	Fosco Maraini
24	E	Akher Khioh	7017	7020	1966 8-10	Öst	Hans Schell
25	E	Urgend (Sirt-e-Urgend-e-Bara)	7016	7038	1963 9-04	Sch	Max Eiselin
26	E	Langar I		7016	1964 7-09	Deu	D. von Dobeneck
27	E	Koh-e-Tez	6995	7015	1962 8-28	Pol	Stanislav Biel, Stanislav Zierhoffer
28	E	Nobaisum S-W?		6995			
29	E	Koh-i-Shayoz	6905	6920	1963 9-20	Öst	Markus Schmuck
30	E	Lunkho 1 (W)	6902	6869			
31	E	Lunkho 2 (E)	6895	6372	1967 8-05	Jap	M. Suzuki (鈴木政孝)
32	H.R	Koyo Zom	(7020)	6872			
33	E	Langar 2 (S)		6850	1964 7-08	Deu	D. von Dobeneck
34	E	Hewara (Hevad)		6849	1965 8-20	Cze	V. Sedivy
35	C	Koh-e-Bandaka Main (S)	6843 (6752)	6660 6500	1960 9-22	Deu	W. von Hansemann
36	E	Shogordok	6838	6855	1963 9-20	Öst	Markus Schmuck
37	E	Langta Barfi	6827	7017 7000 6995	1963 9-27	Pol	Andrzej Wilczkowski
38	E	Nadir Shah	6814	7125	1962 8-27	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
39	E	Gumbaz-e-Safed		6800 6797	1963 8-30	Öst	G. Gruber, Hans Pilz
40	E	Dir Gol Zom (Pyramide)	6877	6778	1967 7-12	Cze	V. Sedivy
41	E	Kishmi Khan	6760	7200 7170	1963 7-28	Öst	Sepp Kutschera
42	E	Langar N		6750	1964 7-05	Deu	D. von Dobeneck
43	E	Tirich Mir N	6732	7070 7056	1965 9-04	Öst	Kurt Diemberger
44	C	Bandaka N	6700~ 6750	6400	1963 7-17	Deu	Thomas Trübsewetter
45	E	S-Glacier Peak		6700	1939 ?	Bri	Miles-Smeaton
46	E	Kotgaz Zom		6681	1966 8-03	Öst	Hans Schell
47	E	Ghul Lasht Zom	6652	6665	1965 8-20	Öst	Kurt Diemberger
48	E	Koh-e-Mandaras	6632	6631	1962 9-04	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
49	E	Ghul Lasht Zom S-E		6611	1965 8-19	Öst	K. Diemberger
50	E	Niroghi Zom	6600		1967 7-28	Deu	Heinz Köbrich
51	E	Udren An S-3		6600	1967 8-04	Jap	K. Yamamoto (山本健一郎)
52	E	Noshaq.....E	6593	6583			
53	E	Point 20,000	6589	6702			
54	H.R	Buni Zom I	6553	6551	1957 8-07	N.Z	W.K.A. Berry
55	E	Shah Dhar (Sirt-e-Urgend-e-Payan)	6550	6445	1963 8-26	Sch	Max Eiselin
56	H.R	Das Bar Zom	6528	6518			
57	E	Baba Tangi		6513	1963 8-?	Ita	Carlo Alberto Pinelli
58	E	Asp-e-Safed	6507	6449	1960 9-04	Pol	B. Chwaszinski
59	E	Langta Barfi S	6500		1967 8-05	Deu	Siegfried Härer
60	E	Noshaq.....E	6447	6480			
61	E	Chhutidum Zom (E)	6442	6441			
62	E	Awar (Auar)		6440	1963 10-02	Pol	A. Wilczkowski
63	E	Saraghrar N-E	6421		1967 7-20	Jap	K. Umezu (梅津晃一郎)
64	E	Chiantar		6416	1967 8-15	Deu	Alfred Linsbauer

No.	Area	Mountain Name	Altitude		First Ascent	Nat.	Leader (s)
			高 (新)	度 (古)			
順位	地域	山名	New	Old	初登頂年月日	国別	隊長
65	C	Bandaka Sakhi	6414	6200	1963 7-17	Deu	Thomss Trübswetter
66	E	P. 6414 (Twins N-6412?)	6412		1967 7-20	Deu	Hartmut Ahlbrecht
67	E	P. 6410 (Twins)	6410				
68	E	Chhutidum Zom (W)	6405		1967 8-16	Deu	Hartmut Ahlbrecht
		(Lunkho 1-SW)					
69	E	Ghul Lasht Zom S	6400		1967 7-20	Öst	Kurt Diemberger
70	E	M-2	6400	6588	1963 9-25	Pol	A. Wilczkowski
71	E	Lopar Zom	6400				
72	E	Kuh-e-Meena N		6380	1965 8-09	Cze	V. Sedivy
73	E	Little Tirich Mir	6361	6400			
74	H.R	Rahman Zom	6350		1967 7-13	Öst	Johann Hofer
75	H.R	Buni Zom N		6338	1965 8-10	Öst	G. Gruber (2nd?)
76	E	Kuh-e-Qara Panja		6328	1965 8-28	Cze	V. Sedivy
77	E	Koh-i-Spurdich		6300	1963 7-?	Cze	V. Sedivy
78	C	Koh-i-Chrehek	6290	6250	1961 8-17	Deu	Josef Ruf
79	E	M 4 a		6274	1962 8-?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
80	E	Udren Darban Zom	6272	6330	1965 9-14	Öst	Markus Schmuck
81	C	Bandaka Tawika		6271	1965 7-12	Deu	Johann Seitner
82	E	P. 6269		6269			
83	E	Uparisina E		6260	1965 8-28	Cze	V. Sedivy
84	E	M-9		6260	1965 9-12	Öst	Markus Schmuck
85	E	Sararich		6250			
86	E	Datti Zom		6249	1967 7-12	Deu	Siegfried Härer
87	E	Q-6		6240	1965 9-12	Öst	Markus Schmuck
88	E	Dir Gol East-side P.	6240				
89	H.R	Shakhandok(Shah Dok)	6237	6320	1965 ?	Ita	C.A. Pinelli
90	C	Koh-i-Mondi	6234	6248	1962 7-26	Deu	Sepp Ziegler
91	E	M-7 (Mandaras E)		6224			
92	H.R	Gordoghan Zom		6210	1965 8-04	Deu	Horst Schurer
93	E	Uparisina E		6210	1965 8-28	Cze	V. Sedivy
94	E	Koh-e-James		6210	1965 8-27	Cze	V. Sedivy
95	E	P. 6208		6208			
96	E	Achar Zom	6200		1967 7-24	Cze	V. Sedivy
97	H.R	Ghokan Sar	6200	6143	1967 6-27	Ita	C.A. Pinelli
98	H.R	Buni Zom 2		6200	1965 7-25	Deu	Horst Schürer
99	C	Koh-e-ka-Safed	6192	5950	1963 7-11	Deu	Thomas Trübswetter
100	E	Kuh-e-Meena E		6190	1965 8-09	Cze	V. Sedivy
101	C	Shakh-i-Kabud	6190	6150	1961 9-06	Deu	K. Brenner
102	E	P. 6166	6166				
103	H.R	Tuiyo Anno Zom		6158			
104	E	Chatiboi		6150	1967 8-28	Deu	Alfred Linsbauer
105	H.R	Wasam Zom		6150	1965 8-26	Ita	C.A. Pinelli
106	E	Koh-i-Warg	6130	6500	1963 7-?	Öst	Sepp Kutschera
107	C	Koh-i-Sisgeik N (Main)	6130	6090	1965 8-30	Bri	Gavin Johnstone
108	E	Shingeik E.....	6130		1966 7-03	Öst	Alfons Hagn
109	E	Warghut		6130	1967 8-31	Deu	Alfred Linsbauer
110	C	Koh-i-Tundy Shagai Shah		6121	1965 7-26	Deu	M. Keierleber
111	E	Turm (Niroghi Gl.)	6120		1967 7-20	Deu	Heinz Köbrich
112	C	Bandaka Uris		6110	1965 7-20	Deu	Johann Seitner
113	C	Koh-i-Marchek	6100~	6060	1961 9-01	Deu	Otto Huber
			6200				
114	C	Koh-i-Morusg (Marchek N)	6100~	6435	1965 8-31	Bri	Gavin Johnstone
115	E	M-3	6109	6100	1962 8-?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
116	E	Dertna Peak	6100		1965 8-20	Öst	K. Diemberger
117	E	Udren An S-1	6100		1967 8-04	Jap	K. Yamamoto (山本健一郎)
118	E	P. 6096	6096				
119	E	Kuh-e-Barfi		6090	1965 8-27	Cze	V. Sedivy
120	E	Ispindar Shor (Lun Zom)	6088		1967 7-15	Deu	H. Köbrich
121	H.R	Buni Zom 3	6050		1967 7-07	Öst	Johann Hofer
122	E	Uparisina W	6050		1965 8-10	Cze	V. Sedivy
123	E	Singeik.....E		6050	1966 7-08	Öst	Alfons Hagn
124	H.R	Picco Citta di Teramo		6050	1964 8-26	Ita	C.A. Pinelli
125	C	Peak "Z"(a lump between Sakhi and N)	6044				
126	C	Rast Darrah	6035-AJ.1967-1		1966 8-01	Bri	Henry Edmundson
			5959-AAJ-1967				
			5954?				
127	Y	Shayaz		6031			
128	C	Peak "X"(between Pagar & Bo-logron)	6026				
129	C	Yajun Peak (P."Y")	6024		1967 8-03	Jap	M. Masunaga (増永迪男)
130	E	Niroghi Ispindar Sor	6020		1967 7-16	Deu	Heinz Köbrich
131	E	Atak Zom	6012	6100			(possibly climbed)
				6087			
132	C	Koh-i-Parshui	6010		1965 7-20	Deu	M. Keierleber
133	C	Koh-e-Safed	6001	5953	1963 9-15	Deu	D. Grundig
				5760			
134	C	Koh-i-Sisgeik SW	6000~		1967 7-27	Bri	D.K. Scott
			6050				
135	E	M-5		6000	1962 8-?	Pol	St. Biel, St. Zierhoffer
136	C	Koh-i-Jumi	6000	6020	1962 7-26	Deu	Sepp Ziegler
137	E	Ano Gol Zom	6000		1967 7-23	Öst	K. Diemberger
138	H.R	Shupel Zom	6000		1967 8-03	Jap	T. Miyamori (宮森常雄)
139	H.R	Chagri Zom	6000		1967 8-14	Jap	T. Miyamori (宮森常雄)

It is needless to say that, in these area, there are many other 6000-ers which were not listed above. For example, you will find more of them in the ridge-map of the "Hindu Raj and Yarkhun Mountains" which is printed in page 7th of this Bulletin.

You will see the explanation of the abbreviations of the above list and my acknowledgments on the lowest column of the 14th page.

「図書紹介」

“Century of Mountaineering” (1857-1957)
by Arnold Lunn

馬場勝嘉訳
諏訪多栄蔵訳

「登山百年史」

(会員番号 八六五) 成瀬岩雄

本書は一九五七年、英国山岳会の百年祭に際し、スイス山岳財団が英国山岳会へのお祝いのしるしとして、アーノルドランに執筆を依頼して著した、いわば「祝いの献本」とでもいった様なものだ。

登山史を語るには英国を抜きにしては到底成立つものでない事は衆知の事ながら、誠に時機を得た、両国山岳会の間の麗わしき「友情の書」として僕も逸早く入手、座右の書の一つとして重宝している次第である。

この書の内容については先般、望月達夫君からの強引な命令により、自らの浅学非才を省みず、近日発行予定の「山岳」に簡単な寄稿を余儀なくされてしまったので内容紹介について

は其の方で読んでいただくとして……唯、二、三、我々日本山岳会の会員として大いに喜び合いたい記事も載っているが「山岳」と聊か重複する嫌いはあるが「山岳」発行に先立ち此処に紹介して見たくなったのだ。

第十三章の中で、「Prince Chichibu of Japan」と題して秩父宮殿下のアルプスに於ける御登山についてアーノルド・ランが御供した事の思出から殿下が稀れに見る熱烈なる山岳愛好者である事や、人間としても仁徳高く、第二次大戦勃発後、監禁中の在日英大使館員に対して多量の食糧品等を贈られたという慈悲深き行為を述べてそのお徳をたたえ、戦後、ランからその著書「Mountains of Memory」を殿下に御送り申上げたところ、大変お喜びの手紙をラン宛に送って居られる事などが載っている。殿下のラン宛の手紙は真下に殿下の御人柄を表わしたい手紙なので此処に引用して見よう。

I must tell you how much delighted and consoled I was by reading it myself at a most depressing time. Having lost all books on mountains and ski, including the British Ski Year Book, when my Tokyo house was burnt down by one of the air raids. I was particularly pleased to find the record of my unforgettable ski tour with you in the Alps in Spring 1926.

戦災で山岳蔵書を灰燼にせられ、戦後の不安の時代にランからお送り申上げた書物に殿下に心から喜びを以て読まれた光景が目に見える様でランにとても、誠に光榮な、記念すべき、書信であらうし、こんな手紙はチヨット、仲々、ないと思うので此処に写しを記した次第である。恐らく、日本の皇室の方々で英国山岳会の会員となら

れ、しかも名誉会員たるの資格を得る等という事は勿論、有史以来初めての事だし、又、恐らく再びこの様な事は将来、ないだろうと思うにつけ、誠に喜ばしい記事ではないか。

もう一つ、横さんのアイガー・東尾根初登攀の事が載っているがこの時代に漸くピトンやカラビナ等を使う様な所謂、「人工登攀」などが流行し出し、その可否論も盛んになって来た時ではあったが横さんのアイガー登攀はこの人工登攀の対照にならない。横さんの考案によるポールは古い時代のガイド連中が携えて行った梯子の用途と似たりよつたりのもので、「人工登攀」の様にピトンを打ち込んだりして山の構造を変えて登る様な方法とは根本的に違つてゐる。この「人工登攀可否論」の中で特記されているのは誠に喜ばしく、秩父宮殿下や横さんの様な先輩を持った我々山岳会員も大いに喜びを共にしたいというのが僕にこの急いで述べた心境でもあるのだ。勿論、「百年史」の一頁を飾るにふさわしい記事でもあるわけだ。

又、ヒョラヤの章でナンダゴットの登山についても述べられているが、唯、ナスルの事について一言も触れていないのは残念だ。

序で、この書の邦訳は最近拝見したが、巻尾に訳者の解説が詳細に述べられ、最後に「訳文その他、お気付きの点はご示教、ご正正を賜りたい」と述べられているから、この言葉に甘えて私見を述べさせて貰うが、ランの原書の中、第十九章「Modern Trends in Mountain Literature」(登山文獻の近代の傾向)の訳が全章削除されているのは如何うゆう事なのだろう。まさか其代りという事でもないだろうが、原書には全然ない「モン・ブランの初登頂」という一章が載っているのもおかしい事だ。書名だけは原書に忠

越後駒ヶ岳の気象

小出地区山岳遭難防止
対策協議会 編

小出地区山岳遭難防止対策協議会では、越後駒ヶ岳周辺の遭難事故防止の対策の一つとして、昭和41年より、気象庁の認可を受け駒の小屋に観測所を設け、新潟地方気象台、長岡市所在国立防災科学技術センター後援のもとに、夏山の気象観測を行ない、ラジオ放送などによつて、登山者をはじめ関係方面の利用に供した。この観測事業には施設費約40万円、人件費約16万円を要したとのことであるが、今後も郡、町村会の協力により継続していく由である。

この二年間の観測結果を、国立防災科学技術センターの五十嵐技官(本会員の)の多大の努力で、系統的に整理してまとめられたのが、この資料であり、この方面の登山には貴重な資料といえる。

尚本書は希望者には一部二五〇円(送料共)で頒布しておりますので左記へお申込下さい。

新潟県小出町 伊倉剛三、宛
B4版55頁 43・1発行 (Y・M)

冠 松次郎著

「山溪記」

冠さんは八十五を数えられ、老いて足を痛められ、起居が多少は不自由のように見受けられる。その他特に故障もなく益々お元気で静かな日常を過ごしておられる。

この度、永年にわたる紀行、随想を整理修正し、三千枚におよぶ原稿を「山溪記」と題して昨年十一月にその第一巻を春秋社より出版された。引き続き数ヶ月毎に続巻が世に出る予定と(11頁下段へ)



寄贈図書受入報告

(昭43・1)

日本山岳協会寄贈

- (1) 日本山岳協会編『67山岳手帳』昭41
・12 日本山岳協会刊
(2) 日本山岳協会編『68山岳手帳』昭42
・12 日本山岳協会刊
山崎安治氏寄贈

(1) 山崎安治著『山の序曲』昭42・9 朋
文堂新社刊
五百沢智也氏寄贈

(1) 五百沢智也著『登山者のための地形
図読本』昭42・3 山と溪谷社刊
教育図書株式会社寄贈

(1) 明治大学体育会山岳部遭難対策委員
会編『遭難の実態』昭39・12
(2) 竹之下林蔵・長谷川純三・徳久球雄
共著『みんなの登山』昭40・7
(3) 竹之下林蔵・長谷川純三・徳久球雄
共著『みんなのキャン』昭40・7
(4) 徳久球雄編『山の小事典』昭39・12
成美堂書店寄贈

(1) 神前博・西安信共著『山スキー』昭
42・11
(2) 兼松保一著『キャン』昭42・6
(3) 安田正人著『登山』昭42・6
(4) 沼倉寛二郎編『山の歌集』昭39・7
杉田博氏寄贈

(1) 大和幹夫・杉田博・沖允人編『ダウ
ン・ヒマール遠征 一九六五』昭42
・10
文芸春秋社寄贈

- (1) 新田次郎著『富士山頂』昭42・12
(2) 浦松佐美太郎著『たった一人の山』
昭42・12
朝日新聞社寄贈

(1) 本多勝一著『極限の民族』昭42・6
朝日新聞社寄贈

【部報・会報】

- (1) OMCレポート No. 218 (43.1)
(2) 京都山岳 No. 512 (43.1)
(3) 国立公園 No. 216~218 (42.11
~43.1)
(4) 『山嶺』No. 453~454 (43.1~2)
(5) 『自然保護』No. 69~70 (42.12~
43.1)
(6) 『兵庫山岳』No. 8 (43.1)
(7) 『山毛榉林』No. 134~135 (42.11
~12)
(8) 北海道自然保護協会『会報』No. 5
(42.12)
(9) 『山と雪』No. 116~117 (42.12~
43.1)
(10) 『富山県自然保護協会報』No. 30~
31 (42.9, 42.11)
(11) 東洋大学山岳部『西一プラスカ遠征
報告書』
(12) 日本岳友会『聖稜 第一号』
(13) 防衛大学山岳部『踏跡 第三号・ハ
ーガン峰登山特集』
(14) 東京慈恵会医科大学山岳部『JOCH
No. 9 1967』
(15) 『山書月報』No. 60 (43.1)
【雑誌】

- (1) 『アルプ』No. 119 (43.1)
(2) 『岳人』No. 245 (43.2)
(3) 『ハイカー』No. 148 (43.2)
(4) 実業之日本社『SKI '68 第4集』
【その他】

- (1) 新潟県山岳協会『冬山への警告—積
雪期登山の心構えと遭難防止 一九
六七』
(2) 武庫川女子大学『兵庫県縦断踏破学
術調査報告書 一九六七』
(3) 第九次南極観測隊『Japanese Ac-
tivities in the Antarctic』
東海支部原真氏寄贈
(4) アンデス学術報告に関する『Ningo-
ya Journal of Medical Science』
別刷
①『Breath Holding During the
Three Weeks of Sojourn at
High Altitude』
Vol. 29, No. 1, November, 1966
②『A Radio Telemetering Syst-
em and the Changes of Ekg
and Heart Rate of the Subje-
cts Engaging in Mountaineer-
ing at Greater Altitudes』
Vol. 29, No. 1, November, 1966
③『Studies on the Adaptation to
High Altitudes With Special
Reference to Changes in Car-
diovascular Functions』
Vol. 29, No. 3, January, 1967
④『Adjustment of the Diurnal
Rhythm in Body Temperature
by a Transposition Across the
Longitudes with a Moderate
Speed』
Vol. 29, No. 4, March, 1967
⑤『An Analysis of Ekg Recor-
ded by Radiotelemetry in Mt.
Aconcagua and in a Low Pre-
ssure Chamber at Sea Lev-
el』
Vol. 29, No. 4, March, 1967
⑥『南米 Aconcagua 学術遠征に関
する報告』(日本生理学雑誌 第29
巻11号 昭42) 別刷
【洋書】
中国青年登山協会寄贈

(1) 中国青年登山協会編『高山簡記』巨
人出版社刊(中華民国55年)
グレン・コンバース氏寄贈

H. Dieter Schmolund Gerhard
Schauber: 『Europa Camping +
Caravanning/Drei Brunn Verlag
Stuttgart 刊 (1967)』
孫慶錫氏寄贈

(1) 孫慶錫著『登山の理論と実際』成文
閣刊(1967)
風見武秀氏寄贈

(1) Takehide Kazami 『The Hima-
layas』(英語版) 講談社(1968)
Journals Arrived in Jan 1968.

1. 『Alpinismus』Jahrgang 5, No.
11 November 1967.
2. 『Appalachia Bulletin』Vol. 33,
No. 11, December 1967.
3. 『Der Bergsteiger』Jahrgang
34, Heft 10, Oktober 1967.
4. 『The Journal of The Mount-
ain Club of South Africa』No.
69, (1966)
5. 『La Montagne』Annee 91,
No. 51, Fevrier 1965, Annee
93, No. 65, Decembre 1967.
6. 『Mitteilungen des Österrei-
chischen Alpenvereins』Jahrgang
22, Heft 9/10, September/Okto-
ber 1967.
7. 『Rivista Mensile』Vol. 88, N.
7~9 Luglio 1967~Septembre
1967.
8. 『The Yorkshire Ramblers'
Club Journal』Vol. VII, No. 28,
1965.

【会報】
日本山書の会寄贈
『山書月報』No. 21, 36, 40, 45,
46, 52, 53, 58
『山書研究 第六号』(41.6)

【雑誌】
国立公園協会寄贈
『国立公園』No. 158 (38.1)~196
(41.3) 全32冊
(1) 船木威志氏(慶大工学部山岳部員)寄贈
『岳人』No. 156~157 159~160
『山と溪谷』No. 254, 278

(10 頁下段より)

いう。
その第一巻を見ると、A5変型版9
ポイントの一段組で、落着きのある色
調のクロス表紙である。氏自身の刻
印を用いた初期登山時代の紀行、随想
など三四頁。

第二巻は、盛期登山時代として黒部
を中心とした周辺の溪谷。第三巻は初
・盛期登山時代で秩父、立山周辺。第
四巻は中期時代として南北アルプス。
第五巻は中・後期のもの。第六巻は富
士山を中心としたものに大別されてい
る。

ところで明治三十五年頃から大正
昭和の三代にわたる六十余年の足跡
の紀行・随想・研究は、いづれも氏自
身が実際に山に登っての観察。感得に
よる体験に基き、きく卑い労作である。
また、氏が如何に自然に憧れ、何処
までも傾倒し、その感化によって目覚
めた氏自身の哲学は山岳界に警鐘を発
せられたものであろう。

特に秩父に於ける明治・大正時代の
諸溪。また大正初期より昭和中期にお
よぶ黒部・立山を中心とした記録は、
冠さんにして始めて達成せられるもの
である。この五十余年の足跡をく
わしく、美しい文章によって後世に残
された業績は輝々かしいものである。
真の山岳愛好家の座右に備え、一読に
値いするものと信ずるものである。

昭和四十三年二月三日
文京区本郷六丁目三三
岩永信雄

国立公園協会寄贈
『国立公園』No. 158 (38.1)~196
(41.3) 全32冊

【雑誌】
国立公園協会寄贈
『国立公園』No. 158 (38.1)~196
(41.3) 全32冊

【雑誌】
国立公園協会寄贈
『国立公園』No. 158 (38.1)~196
(41.3) 全32冊

書介 (続)



明治大学山岳部

『登頂ゴジュンバ・カン』

早く読まなければと思っているうちにドンドン時が経って今日になってしまったが、やっと昨日読み終った。臆病が総て臆病になっていて以外、誤字は殆んどなかった。臆病という字が何故そう気につくほどに出て来たのか。そこに何かこの登山隊を象徴する何ものがあるような気がしたのである。

この本は記録というよりも寧ろ、参加隊員の随筆集といった方がよいと思う。その意味では、いきなりアンディ・クライマックスの方式をとって、登頂成功を真先に置いたことは成功といえよう。各目の文章も比較的統一がとれていて読みよいものになっている。入沢君やドルジェの負傷事件の痛ましさを除けば、総てがあっ放しで書いてあるので、大変身近な、身につまされるものとして興味深く読むことが出来る。唯私としては、もう少し品位が欲しかったなと思ったところもないではない。学生だけが読むものでもなく、又、一般の小説でもないからである。

さて、臆病という字が何故目に立つたかを考えてみると、それにはいろいろの理由が考えられるが、それこそあっ放しに言えは、まずこの隊が経済的に相当切りつめられたものであったということ。第二は全員が少なくともヒマヤでは一年生であったこと。第三にはそれら原因として、たとえ最後

には成功したといっても、相手が少しばかり手強わ過ぎたこと。第四は凡ゆる意味を含めての、そして止むを得なかったのかも知れないが、高度馴化その他の準備の不足。第五には重傷者や、重軽患者が幾人か出たこと。私にはこんな風に考えられるのであるがどんなものであろうか。

最後に私個人の狭い見聞かも知れないが、登頂者が植村君とベンバ、ただであったことが一つの不満として残っている。当時私がこのニュースを眼耳にした時、直ぐ頭をかすめたのは、驚に油揚げ、というところであった。植村君には悪いが事実そう思ったのだから仕方がない。

今ではこの随筆集を読んで一層その感を深くしている訳だが、私としては少なくとも藤田君その他二、三の人々に、もう少し頑張ってもらえなかったのだろうかと思えることである。成否に拘わらず一つの登山隊を褒めることは簡単である。だがそんな提燈持ちばかりしていたのでは進歩がない。言つべきことは言う。その方がお互いにいいのではないか。

大塚博美氏にも私は、どうせ褒めませんよ、と予め断つてある。それを文字通り実行したに過ぎない。老練曲りのたわことして葬り去られても結構である。

最後にもう一つ注文がある。正式報告書が勿論他の形で出るとは思うが、その時には、ゴジュンバ・カン等に関する探検史、ゴジュンバ・カンとチロ・オニエとの関係、山名の由来のもう少し詳しい説明等についての研究発表を期待させてもらいたいものと思ふ。

一九六七年九月発行、定価九〇〇円、三三四頁、編者高橋進、著者堂出版、カラー写真二四枚他。略図二枚。(43128—吉沢一郎)

英文日本紹介図書 受入れのお知らせ

この程菅原藤井健氏のご尽力により、交通公社から同社発行の英文図書十三冊のご寄贈がありましたのでご紹介致します。

1. Yasunosuke Fukukita: 『Tea Cult of Japan』 (Tourist Library : 4) 1965
2. Matsunosuke Taisui: 『Japanese Gardens』 (Tourist Library : 5) 1964
3. Shizuya Fujikake: 『Japanese Wood Block Prints』 (Tourist Library : 10) 1962
4. Aya Kagawa: 『Japanese Cookbook』 (Tourist Library : 11) 1967
5. Saburo Ienaga: 『History of Japan』 (Tourist Library : 15) 1967
6. Bun Nakajima: 『Japanese Etiquette』 (Tourist Library : 18) 1965
7. Daiseiz T. Suzuki: 『Zen and Japanese Buddhism』 (Tourist Library : 28) 1966
8. Kotaro Hasegawa ed. 『A Guide to Tokyo and Environs』 1967
9. Kotaro Hasegawa ed.: 『A Guide to Kyoto, Nara, Osaka, Kobe』 1966
10. Kotaro Hasegawa ed.: 『Japan: The Pocket Guide』 1967
11. Katsuji Yabuki ed.: 『Japanese Gardens and Architecture』 1965
12. Roku Okada: 『Japan Travel Dictionary of Tourist Resorts』 1963
13. Japan Nation Tourist Organization: 『The New Official Guide Japan』 1966



図書委員会報告

(42・7・43・1)

新ルームへ移転後七カ月の図書委員の活動状況をお知らせ致します。

七月十八日

坂、野上、初見、山崎、松田、大橋、石

①経過報告

②委員及び職員の見解

③委員の分担を決める。

④図書整理方法の検討。

⑤貴重書・準貴重書と一般図書とを区別し、貴重書は談話室の書棚にて保管する。

⑥ラベルをフルに活用すること……色および番号・記号による分類法につき検討した。

⑦一般図書の中新刊書の配架方法は、出版社ごとのブロック式とする。

⑧特殊資料・特に小冊子、パンフレット類の管理はファイリング・システムを採ることとする。

⑨大蔵事務員の当分の仕事は、現品と台帳との照合、バックナンバーを揃えること。目録カードの作成等であるが、特に故吉田竹志氏寄贈図書の受け入れを急ぐことにする。

⑩図書収集の方法について検討。

⑪予算の関係があり、原則として寄贈にたよる方針とする。受贈図書は会報

に掲載して受入れの報告をするだけでなく、できる限り図書紹介を書く。なお新聞・雑誌等に掲載された新刊図書の書評・広告等は、スクラップ・ブックに整理することとする。

⑫今後の委員会の開催日時。

・毎月第二・第四火曜日午後六時四十五分よりとする。

・但し第四火曜日は常任委員会とし、常任委員の大橋・村石・中島・野上・武田・平山が集まる事にする。

⑬図書閲覧規定の改正。

⑭ルーム移転に伴い改訂する必要があるため、松田理事が原案を作成することとする。

八月八日

小林、初見、松田、中島、野上、武田、平山。

①経過報告……(大越)

②重複図書の処理について。

③各支部へ保管を委託することを理事会で決めたので、各支部へ連絡する。

④図書利用規定の原案を検討する。

⑤製本の件。

⑥合本は中林製本所へ依頼、修理は別の所へ依頼することとする。

⑦先ず基本カードを作成すること。

⑧談話室の貴重書取扱いについて。鍵の取扱いはルーム鍵取扱い規則によること。

⑨受入図書の事務処理

⑩札状、寄贈依頼状を印刷し、寄贈図書に対する管理を徹底する。

⑪地図の整理。

⑫婦人部の応援をたのみ、早急に完了することとする。

九月十二日

山崎、大橋、野上、平山。

①現品と台帳照合の結果判明した行方不明図書の処理方法について検討。(和書)

予備の本がある場合は、重複記入と

して処理。その他の図書については発行所、著者に在庫を問合せて寄贈を依頼する。なお補充できない図書については会報に掲載して、会員の協力を求めることにする。

(洋書)

倉知委員の帰国を待つて整理し、洋書についても最終的には会報で寄贈依頼を行うことにする。

②図書寄贈依頼

図書室の受入態勢がととのったことを会報に掲載し、個人の蔵書の寄贈を依頼することにする。

③整本の件

整本ミスのあったものについては、再製本を依頼することにする。なお、雑誌類における製本価値の有無についても併せて検討した。

④談話室の書棚の使用法について

洋書類のコンバックへ移動するものの中書を検討、併せて予備本、製本本必要書の保管場所につき検討した。

十月十七日

深田、松田、山崎、大橋、野上。

①この一本展について

テーマ……明治百年山岳図書展。展示物内容……明治時代発行の書物。目録担当……大橋委員。

②寄贈書の紹介を積極的に行うこと

③部報類のバック・ナンバーの欠号については、OB・関係者に協力を求めることにする。

④図書室利用規定について

利用者の目につき易い位置に開室時間を掲示することにする。尚午前中の閲覧は、管理上行わないことに決定。

⑤製本完了の報告……(大越)

十一月十四日

深田、山崎、小林、大橋、野上、村石、武田。

①「この一本展」開催の準備打合せ

②一本展会場下見の件。

担当委員……大橋、野上、村石の三名

十一月二十八日

深田、小林、山崎、大橋、野上、村石、武田。

①「この一本展」に関する最終的打合せを行う

十二月十九日

初見、野上、武田。

①図書整理全般につき検討

②移転後六カ月間の運営について反省。

一月九日

深田、初見、山崎、大橋、野上。

①支部への保管委託図書について

保管希望のあった東海支部委託図書リストの検討を行う。

②故磯野計蔵氏蔵書寄贈の件

③図書交換会開催計画について検討。意義、趣旨、時期、場所等について検討する。

④「この一本展」について反省

⑤支部刊行物の収集について。

一月二十三日

松田、野上、倉知、村石、武田。

①東海支部へ保管を委託する図書のリストを検討し、この案で理事会にかけることにする

②磯野文庫受入準備状態につき報告……(倉知)

③図書交換会開催の見通しについて検討する。

④主要山岳部々報の欠号補充方法について検討。

⑤製本依頼の件

予算の関係で来年度までまっことにする。

⑥会報の図書紹介欄で紹介された図書でも、本会の図書室にない図書が多いが、この種の図書を推薦に価する図書であるので極力集める方針とする。

⑦地図台帳作成方法につき検討。

常務理事会

▽日時 一月十六日(火)午後六時三

○分

▽場所 本会ルーム

▽出席者 深田、辰沼、大塚、松田、宮下、丹部、飯野

▽議事

(1)来年度予算案検討の件

(2)日本建設協会償還金の件

(3)維持費制度検討の件

(4)募金委員会、レセプションの件

(5)滞納会員に対し会費督促の件

(6)会員名簿作成の件……一九六〇年版の形式にする

(7)図書基金制度検討の件

(8)故古市美津雄氏香典の件

(9)東海支部へ保管を委託する図書のリスト……承認

(10)推薦状発行の件……左記の各隊に推薦状を発行することを了承

(11)札幌大ヒンズー・クシム隊

(12)法政大学ブニゾム登山隊

(13)相模野山台湾登山隊

(14)九州産業大学台湾登山隊

(15)新入会員の承認

今後は理事会がないので、本日の常務理事会で承認する。(以上)

常務理事会

▽日時 一月二十九日(月)午後六時三十分

▽場所 本会ルーム

▽出席者 加藤、深田、大塚、松田、飯野、丹部

▽議事

(1)昭和43年度収支予算案検討の件、飯野理事作成の原案では一七〇万円の赤字が計上されるので、赤字が七〇万円になるまで修正することにする。

(2)日本建設協会の償還金二二〇万円(外苑コーポ権利金)は予定通り一月一六日に返還になった。

(3)募金対策の件

(4)故中村清太郎氏遺作展の件

(5)信濃支部、神河内山荘運営委員小里頼忠氏お見舞の件

(6)その他

(以上)

常任評議員会

▽日時 一月三十日、午前八時～九時

▽場所 国際文化会館

▽出席者 松方、佐藤、石原、吉沢、中屋、藤井、折井各常任評議員、松田理事

▽議事

次年度評議員推薦の件

①任期満了は折井評議員一名のみ

②未だ任期あるその他評議員の中から理事に若干名を推薦した向きもあり、離任することになる

③地方在住評議員の中から二名程度交替とする

④以上による退任評議員の枠内にて適任者を新評議員に推薦することにした。

二月理事・評議員会

▽日時 二月一日(木)午後六・四五

▽場所 本会会議室

▽出席者 松方会長、三田、渡辺副会長、理事 深田、辰沼、大塚、松田、飯野、宮下、丹部、竹田、広谷、長尾、酒井、関口、大貫、中島、評議員 吉沢、佐藤、高山、石原、川森、折井、沼倉、監事 牧野、(委任) 加藤理事、野田理事、評議員 伊藤、中屋、後藤、堀田、松本監事

▽議事

議事に先立ち韓国山岳会の孫慶錫氏の挨拶があった。

(1)昭和43年度通常会員総会開催の件。四月二十日(土)午後三時より、本会会議室で開催。総会後懇親会を行うが、昨年度の様な晩餐会形式の「春季懇親会」は行わないことに決定。

尚全国各支部の総会は、通常会員総会前に開催し、この報告を通常会員総会で行う様にしてはどうか。

(2)支部長会議を通常会員総会の翌日に開催してはどうか。

(3)全国各支部では、通常会員総会前に委員会を開催して、前年度の事業報告、収支決算報告、来年度の事業計画、予算案を作成。支部総会は、通常会員総会、支部長会議後に、支部長が招集し、理事会の意向を反映できる様にする。(但し連盟体の場合は、この逆でよい)

(4)支部長会議は通常会員総会の翌日に開催することに決定。

(5)図書基金制度検討の件

①図書基金が完了した後、常に募金の受入れ態勢をとのえておくべく、図書基金制度を設けたい旨、松田理事より提案あり、本件採択、通常会員総会の承認を得た後、実施することにする。

(6)会員名簿発行の件

発行の遅れている本件につき検討。担当の丹部理事に早期刊行に努力する様重ねて要請した。

(7)婦人懇談会日印合同登山隊の件

一月上旬印度側から手紙が届き、これにもうすぐ計画の概要が決った。隊員は五名を予定したが、四名に變更し、全員空路渡印することにし、日本側の隊長は宮崎英子氏に決定。

募金は、新聞社関係30万円、その他10万円を予定している。

尚本日の理事会で次の公文書を提出すること承認した。

①インド大使館ビザ・セクションへの依頼状。

②外務省情報文化局長への挨拶状

③隊員の勤務先への依頼状

④インド登山財団への会長の挨拶状

⑤ルム基金募金報告ならびに対策検討の件。

◆ルーム基金入金報告◆

事務局

1月1日～1月31日の間の、ルーム基金募金の応募者は左記の通りです。

申込件数 一四件
(含追加一件)
申込口数 四五・五口
総申込件数 一二八二件
総申込口数 七、〇九九口
(募金目標に対し八八・七%)

飯野理事作成の原案(常務理事会での修正案)につき検討したが、支出をおさえることも限界にきているので来年度あたりから値上げをしなければ運営が困難なことを確認した。尚値上げ実施までの間は経過措置として、維持会員制度等を考えることにするが、これらの点については三月の理事会まで保留することにした。

(6)昭和43年度収支予算案検討の件。
(7)昭和43年度新役員推薦の件、任期の来ている人の確認を行ったが、新役員については発表する段階にまで至っていないので、人選を常務理事会に一任することにする。

(8)その他
①東海支部より問合せのあった支部友、準支部員制度の件を了了する。
②東海支部に保管を委託する図書、洋書12冊、和書8冊、を了承。
③松本市の日本民俗資料館は四月に開館の予定であるが、信濃支部を通じて借用方依頼のあった50号、28号の絵の貸出の件を再確認した。

④北海道自然保護協会より、大雪山国立公園内の道路建設計画に関する要望書の写しが届いた。
⑤中央日本観光協議会主催で二月十五日に開催の観光地美化打合せ会には、渡辺副会長が出席することにする。

山二六九号(43年11月)に九月末現

氏名		会員番号	入金額	現住地
竜星閣 會員外法人 日本山岳会路後支部	安藤久	男五五四七	一	北海道
	小菅秋五三八七	秋五三八七	一新潟	一新潟
	沢田正太郎	三六三三	三	神奈川
	曾山志計雄	四六二〇	一	新潟
	高本孝四三三五	孝四三三五	二	新潟
	田村俊介	五八五四	三	東京
	トヨタ自動車工 (業株)山岳部	三九一七	二	愛知
	萩千夏子	六三八七	一	北海道
	橋本富夫	六四三七	一	大分
	林一夫	六四〇四	五	神奈川
	本片山数雄	三〇八七	一	広島
	村石幸彦	四九七八	三	東京
	本会關係その他			
追一・五				
計一四・六				
二〇				

⑥山岳の広告が目録額六〇万円に對し、現在まだ二五万円しか集っておらず協力方が重ねて要請された。

⑦中田評議員から提案のあった理事・評議員会を、月の中旬以降に開催する件は、種々と都合があり、保留することに決定。(以上)

既申込者の中よりの入金報告

山二六九号(43年11月)に九月末現

氏名	会員番号	入金額	現住地
浅利 欣吉	五三三三	一	北海道
池田 正一	二六二四	一	鹿児島
伊藤 幸一	一八七四	一	大阪
岩佐 康夫	五九四八	一	長野
宇田 川九郎	四四〇八	二	東京
遠藤 登六	二二二二	三	東京
小野 敏之	六一一七	三	東京
岡田 光行	五九四九	一	秋田
小山 千樹	四八四四	五	東京
佐伯 富男	二四五四	二	富山
真田 孝五	五七五七	一	石川
高木 泰夫	五六一五	二	岐阜
田代 儀雄	六一〇七	三	東京
陳 光漢	五〇八八	三	神奈川
細井 隆司	四九二二	三	東京
三浦 寿六	二九二二	三	埼玉
山口 輔一	一九九七	五	東京
吉野 貞造	四四九九	二	宮城
前芝 茂人	五二三五	一	京都

在の募金応募者の名簿を発表した際、未入金者53名に捺印を付しておきしたが、その後山二七一号に12月8日現在の入金者名を発表したのに次いで、12月10日～12月8日の間に、左記20名の方より入金がありましたのでご報告申し上げます。尚まだ25名の方が未入金です。宜しく願ひ申し上げます。

◆ルーム日誌◆(43年1月)

15日 新年休館
9日(火) 図書委員会
11日(木) 日印婦人合同登山打合せ
16日(火) 常務理事会
17日(水) 婦人懇談会「インド、チャンパ地域について」講師 田久弥氏
19日(金) 米国山岳人エドワード・E・バイル氏来館
22日(月) 集金常任委員会
23日(火) 図書委員会
24日(水) 第24回小集会「二橋大学山岳会ヒンズー・クシニ遠征報告」
29日(月) 常務理事会
一月中来館者 二三三名(小集会出席三〇名を含む)

—continued from page 9—

Abbreviations (略語解)

Bri...British,
Deu...Deutschland,
Ita...Italy..
N...North,
Pol...Poland,
W...West,

C...Central Hindu Kush,
E...Eastern Hindu Kush or East
Jap...Japan,
N.Z...New Zealand,
S...South,
Y...Yarkhun Mountains.

Cze...Czechoslovakia,
H.R...Hindu Raj,
Nor...Norway,
Ost...Osterreich,
Sch...Schweiz,

Acknowledgments

Even if it might be far from completeness, I must express my deepest gratitude to my many friends who helped me in sending their latest and precious informations for the preparing of this list. It is my greatest honor to introduce you some of their names here, especially: Adolf and Kurt Diembergers, Wolfgang Frey, Gerald Gruber and Jerzy Wala.

—Ichiro Yoshizawa (Compiler)—

◆山岳図書交換・販売の集り◆

図書委員会

会員の持っている山岳図書の交換、販売会をやるうではないか、というのはかねてからの念願であったが、二月の図書委員会、ひとつ会報に予告を書いてどの程度反響があるか、アドバリンをあげて見たら、ということになった。

会員各自手持ちの本で、不用なものをルームに持ち寄り、適当な値段で交換するなり、買い求めたりしようというのがある。四月の終わりに、あるいはもっと遅くなるかも知れないが、とにかく図書委員会ですういう集りをやることになった。出品を希望される方は、出品書籍名、希望価格、氏名、住所、会員番号を書き添え、この原稿が会報に出てから、遅くとも十日以内くらいまでに図書委員会まで御通知いただければ幸いである。また出品しなくても、会員なら購入出来るようにしたいし、会員で欲しい本を求められる機会も作りたい。地方会員へはどうするかという点などまだ研究の余地は多いが、あわせて御希望、御意見をお寄せいただきたい。

『会員近況』

小里頼忠氏

本会神戸内山荘運営委員、小里頼忠氏（信濃支部）は、昨秋より入院加療中でしたが、最近に至り、両脚マヒ、頭痛その他相当重症の様子です。御全快を心より祈念して止みません。（入院先）

松本市元町 河野外科医院。

藤島 玄氏

本会信濃支部長、藤島玄氏は本年正月、右脚骨折のため入院加療中。御全快を祈念致します。

集記

★一部新聞に又カトマンズ情報が入ったようだが、そういうニュースに一喜一憂するのはまだ早いと思うがどうであらうか。それにしても去年のH・Kは、アドルフ老からの最近の情報によると、日本の11隊を加えて全部で28隊になっている。ドイツとオーストリアを加えて11隊であるから、日本は二国分

出かけている訳である。今年も既に立派な計画書の出来ているのが少なくとも5隊、目下準備中が三隊はある。この分だと今年は又去年を上廻ることになる。

そういうこともあり、又、立山での研究会の主題がH・Kになりそうなので、本号には、最も新しい情報を参考にした、H・Kの高山表と、別にH・Rの概念図を入れておいた。H・Kに関心の深い人々のお役に立つことが出来れば幸いである。（吉沢一郎）

昭和四十二年度

「山」編集委員の顔振れ

編集代表

吉松 小宮 坂竹 井本 内方 下田 敏矩 通全 秀雄 一 明祥 雄弘 樹一郎

担当理事

昭和四十三年三月十日発行

東京都千代田区神田錦町三三三 向井ビル

発行所 法人

編集代表 日本山岳会

頒価五十円

（293）七四四一

東京都港区赤坂一丁目三番六号 振替口座東京四八二九番 印刷所 株式会社 技報堂

あなたのネガから パネル張り

山岳写真

ありし日の、苦斗と歓喜をいまここに

35 mmからすばらしい迫力！

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。

代金は着品後10日以内に送金下されば結構です。なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申上げます。

お気軽にネガを送って下さい

白黒の部

■全紙半分……………パネル張り ￥ 1,200
■全紙（新聞1ページ大）……………パネル張り ￥ 1,600
■全紙2倍……………パネル張り ￥ 4,000

カラーの部（ネガ、カラーに限りです）

■四切……………パネル張り ￥ 1,500
■半切……………パネル張り ￥ 3,000
■全紙……………パネル張り ￥ 5,000

上記以外のサイズ、または同時に多数のご注文の際はご照会下さい。別にお見積申上げます。



優れた技術とライセンスの

カタログ進呈

本多写真

本多善博

名古屋市熱田局区内柴田西町1-16 TEL (611) 7047

山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店

登山用具専門店
プライスリスト進呈
山の店

大阪市北区曾根崎上1-24 TEL 341-4192

山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店